

川合 眞紀 所長就任

(分子研レターズ編集委員会からご挨拶をお願いしました)



分子科学研究所の設立は1975年。分子科学に対する大いなる期待を担い、化学と物理の力を結集して、期待に応えていく方針は、分野融合型研究の走りであり現在でも新鮮です。当時大学院生だった私にとって分子研は理想的な研究所で、ここで働くことは憧れでした。所員としてはご縁がなかったものの、共同利用を通じて計算機やUVSORを使わせていただきました。80年代前半の分子研は国内外から若い研究者が集まり、暑苦しいほどの熱気にあふれていました。主人が当時の電子構造部門で助手を務めていたこともあり、公私ともに皆さんとお付き合いがあったことも、思い出されます。当時の若手は、今や泣く子も黙る大御所であることは、いうまでもありません。分子研の思い出は尽きません。研究者人生の最後の仕事を所長として分子研に勤めることになり、ご縁を感じております。分子科学のフロンティアを牽引し、研究人材交流の要として、そして、大学共同利用機関として大学の分子科学研究を支える存在であり続けるためにみなさまのご支援をお願いします。

設立以来41年、この間に多くの画期的な研究が行われ、日本の分子科学研究を支える数百人もの人材を輩出してきました。有望な若手を育て、教授や准教授として大学へ還流する流動的な人事を続けています。若手育成の考え方は今ではどこの組織でも重点課題と

して実施しており、これも時代を牽引する施策でした。国内で培った若手育成の考え方を諸外国へも展開すると同時に、人材還流の最後のステージへのサポートにも一策を講じたいと考えております。

分子研は、物性物理の分野にも大いに貢献してきました。若い頃に十倉好紀さんや永長直人さんが頻繁に分子研に来ていましたし、計算機や放射光などの施設利用に留まらず、物理や化学の壁を越えて分子研らしい広がりのある研究が展開されました。個々の学術分野を超える学際的な研究の核として国内外の研究機関との協働研究を強化していきます。

近年、分子研は生命科学の分野にまでその研究対象を広げてきました。合成生物学という学術分野が認知される時代に、化学に立脚した視点で生命科学の題材にどう取り組むか、分子研で培った理論化学の力、UVSORで完成した顕微鏡測の力、そして分子合成や細胞を構成する要素分子から生命を生み出そうとする研究の成果を結集して、生命科学分野の本命「生命とは何か？」に一筋の風を吹き込むべき時を迎えています。生命科学分野のビッグデータの解釈にも、これらの知識は有効です。キャンパスを同じくする基礎生物学研究所や生理学研究所との有機的な連携を通じて、新たな一歩を踏み出します。

かわい・まき

1952年東京都出身。

1980年東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程修了。

1980-1985年博士研究員として、理化学研究所、東京大学(学振)、大阪工業試験所(通産省)、大阪ガス(株)総合研究所、で経験を積む。

1985～1988年理化学研究所研究員。

1988～1990年東京工業大学工業材料研究所(現応用セラミックス研究所)TDK寄附研究部門客員教授。

1991～2004年理化学研究所主任研究員(表面化学研究室を主宰)。

2004年～東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、理化学研究所主任研究員を兼務(2010年まで)。

2010年～2015年理化学研究所理事(研究担当)、東京大学教授を兼務。

2016年から現職。

第16回猿橋賞(1996)、日本表面科学会賞(2005)、文部科学大臣表彰(2008)、第64回日本化学会賞(2009)、Gerhard Ertl Lecture Award(2015)、Medard W. Welch Award(2016)を受賞。



所長室は研究棟222号室にあります。白を基調としたとても明るいお部屋で、所々にいただいたお土産のオブジェが置いてあります。特に思い出深いお土産をお伺いしたところ、1本足で立っている白熊だそうで、喜びのダンスを表現しているそうです。川合所長の机の上で踊っていますので、所長室をお訪ねの際は是非ご覧ください。(編集委員 記)